

私は旧制の高等商業学校（現在は大学の経済学部）で学んだ後、大学（文学部）で実験心理学を専攻しました。経済学経営学商業学を勉強したあと、心理学を専門的に学んだという経歴の人はアメリカでも日本でも非常に少ないようです。

大学院時代にも、認知を中心にした実験心理学の研究を続けていたのですが、鹿児島大学の助教に招かれた頃、我が国でも民間放送が全国的に普及し、鹿児島に誕生した南日本放送に依頼されて、ラジオの聴取率調査やエリア内の消費者の生活行動、消費者行動の調査研究を始めるようになったのが、私がマーケティングサーチャや消費者心理広告心理の調査研究、ひいては広く産業心理学を専門とするようになったきっかけです。

鹿児島時代には南日本放送と共同で、あるいは民間放送連盟からの委嘱を受けて、いくつもの新しい調査研究を手がけました。新発売の商品を、ラジオのスポットCMだけで連続的に広告し、その広告効果の推移を、放送前、一ヶ月後、三ヶ月後、

六ヶ月後、放送終了一ヶ月後と五回に渡って時系列的に調査分析をした研究や、テレビ番組の視聴率の予測モデルについての実証的研究（これは当時日本で最初のものではなかったかと思えます）、あるいは心理学の投影法やSD

私の研究

——消費者心理の研究25年——

小嶋外弘

学専攻）へ招かれて産業心理学を担当するようになった後、本腰を入れて消費者心理の問題の理論的実証的研究に努め、「消費者心理の研究」（昭和三九年日本生産性本部）としてまとめました。その後もこの分野の研究を続け、昭和四七年に「新・消費者心理の研究」（日本生産性本部）を出しました。

他方昭和三十年代の後半から四十年代にかけて、日本の消費者の生活や意識が大きく変貌する時期に直面し、その解明にも努め、「これからの消費者像」（ダイヤモンド社、昭四一年）、「消費者ニーズをどうとらえるか」（ダイヤモンド社、昭五二年）をまとめました。

明や分析に努めました。その成果の一部は、東大の林周二教授編の「イメージと近代経営」「企業のイメージ戦略」（いづれもダイヤモンド社）に執筆しました。

昭和三十八年に同志社大学（文学部心理

マーケティングサーチャや消費心理といった狭い分野だけでなく広くマーケティング一般についても関心を抱き、「マーケティング・セグメンテーション」「マーケティング・セグメンテーションの新展開」ともにダイヤモンド社、後者は慶大商学部の村田昭治教授との共編著「昭四一年」を編みました。また、同志社大学心理学専攻出身の実務家十数名を中心として、毎月一回夜続けてきた

共同研究の成果をまとめた「個性化のマーケティング」(ダイヤモンド社昭四八年)を出したのも思い出に残る仕事です。

また他方で、昨今QC(品質管理)で有名になった日本科学技術連盟から頼まれて、同連盟の関西新製品開発研究委員会の委員長を五年ほど続けたこともあり、消費者サイド市場サイドからの新製品新商品開発の方法論についての研究に従事して、「商品開発のための消費者研究」(日本科学技術連盟出版社昭四七年)をまとめました。

その後、松山義則先生のおすすめとほげまじりによって、これまで直接間接に手がけてきた四百件余の消費者調査をベースにして、その中から、多変量解析の手法を用いて分析を行った五〇件程の調査研究の結果を中心にして、「消費者行動の計量心理学的研究」という論文をまとめ、昭和五四年四月に同志社大学から文学博士の学位を授与されました。同志社に職を奉じて二〇年程になりますが、かねがね同志社出身でないことを残念に思っていた者として、伝統ある同志社大学から学位を授与されたこと

は、同志社と私とのつながりが一段と強固になった思いで、有終館における学位授与式の光景が今でも鮮かに印象に残っております。

現在私が関心を持っている研究テーマは、「価格の心理学的研究」です。価格の問題は、マーケティングに於ても購買行動を考える上に於ても非常に重要な要因であるのに、これに関する研究が、理論的にも実証的にも大変乏しいのが現状です(日本だけでなく欧米に於ても)。

消費者心理という観点からこれにメスを入れようと数年前から調査研究を続けております。またその一環として「心理的財布」のテーマの研究を続けております。これは複雑な消費者の購買心理を解くカギとして二〇年程前から私が提唱している考え方で、例えばデパートで二千元も高い方の洋服を買った主婦が帰りのタクシー代がもつたいないということやバスで帰宅したり、帰宅後近所のマーケットで十円二十円安い豆腐や大根を求めて買い廻るのは何故か、

大学生でいえば書物の価格が二千元をオーバーすると抵抗感が強いのに、輸入盤のLPレコードが二千八百円でも「痛い」と感じない夜のスナックで三千円五千円の支払いには抵抗感が少ないのは何故か、などといった消費者心理の矛盾を解明しようとするものです。

これに関する実証的調査分析を日本広告学会で当時心理学専攻の大学院生だった現在北海道大学文学部行動科学科助手浜保久君と共同で発表し、それが日本心理学会の権威ある欧文の学術専門誌 Psychological Researchに最近掲載を許されましたが、ここにも時代の流れを感じます。

単なる机上の論議でなく、消費者を生きた人間としてとらえ、心理学の基礎的理論と消費者心理との結びつきを重視しながら、複雑な消費者行動を実証的理論的に解明する仕事を今後も続けて行きたいと念願しております。

(大学文学部教授)

OECD（経済協力開発機構）が日本の環境政策をレビューした報告書が『日本の環境政策——環境政策は成功したか——』（日本環境協会）として公刊されている。このレポートによれば、公害に対しては改善がみられるもののアメニティ（生活の質）に關してはほとんどみるべきものはないと厳しい指摘をおこなっている。

戦後の荒廃から立ち直るために、日本はひたすら「物質的な豊かさ」を求めてきた。この時期にあつては、「物質的な豊かさ」の追求のために、何よりも「経済成長」が国民の単一的な目標になりえたし、それにもまして「経済成長」そのものが価値をもつ時代であつたといえよう。この豊かさを達成するには何らかの犠牲（費用）が伴うのが常であり、高度成長期にあつては公害・環境の悪化がまさに「経済成長の代価」（E・J・ミシヤン）であつた。

日本で公害が社会問題としてクローズアップされる契機となつたのは、東京杉並区に発生した「光化学スモッグ」が中流家庭をおそつたことである。戦後にかぎって

も、公害の発生は地域的にはやくから頻繁にみられるが、それが社会的問題となつたのは、東京において、しかも平均的日本人家庭＝中流層にまでその被害が及んだということをぬきにすることはできない。これによつて社会的

私の研究
散乱性廃棄物対策をめぐって
—空カン問題への視点—
郡 宥 孝

た。経済成長の恩恵を享受していた中流層にその代価たる「つけ」がまわつてきたのである。「つけ」が中流層に及ばなければ、公害問題はローカルな、しかも自分とは無関係なものであり、一部の人がとをそつ

れによつて社会的に事態の深刻さが認識され、それまで地域的な問題であると考へられていた公害が身近なものとして中流層が危機感をいだいたことが解決の模索への糸口をつくつたが、じつに問題の発生からは長い時間を必要とした。

た問題としてかたづけられた恐れが多分にあった。この意味で、公害問題は、極めて所得分配の問題でもあつた。そしてまた、中流層の身勝手な非難することもできよう。しかし、重要なことは、経済成長が一方において中流層にまで豊かさをもたらしたものの他方において成長の代価をも要求する事態になつたこと、それにもまして、豊かさはしよせん相対的なものでしかないことをはっきりさせたことである。いわゆる「成長の社会的限界」（F・ハッシュ）である。

このような経済成長による豊かさがかえつて中流層の欲求不満をもたらしたことは、一般に「豊かさのパラドックス」（I・クリストル）といわれる。

ところで、経済成長は本来的には経済政策的な目的のひとつであり、豊かさの選択の問題であつた。しかし、成長はその論理にしたがい、物質的必要を超えて拡張をもたらす。このため、経済成長は選択ではなく、強制となる側面をもつことになる。このようにして成長の論理は経済構造にビル

トインされるや、その論理にしたがって、「無駄の制度化」(都留重人)や「使い捨て」の経済構造(直線型経済とかカウボーイ経済ともいわれる)を定着させた。

このような状況の中で当然もとめられるものは、量の拡大による豊かさではなく、豊かさの質—生活の質—であろう。

ところで、OECDレポートでも深刻な公害問題(大気汚染や水質汚濁)に対する規制の強化によって次第にその改善がみられたと述べている。このことは取りも直さず大気汚染や水質汚濁の浄化をすすめればすすめるほど汚染物質は固形廃棄物の形で蓄積されることを意味する。廃棄物問題は「第三の公害問題」といえよう。

昭和46年に成立した『廃棄物処理法』は、従来的一般廃棄物(ゴミ)に加えて産業廃棄物を適正処理の対象とした。ここにいる適正処理は公害防止をその内容とする。その後の日本経済が石油ショックによって次第に低成長に移行するにしがって環境問題から資源問題へとその力点が変わるにつれて、特に企業における資源のリサイク

ル、また地方自治体の責務となつていよう。ミ処理においても再資源化(ただし、低成長以降、地方自治体は財政難、迷惑施設たる清掃工場、最終処理地の確保難から分別収集によってゴミの減量化をはかるようになってきている)が試みられるようになった。

ところが、『廃棄物処理法』は、定点から排出される「日常性のゴミ」を処理することにその主眼があり、空カンを中心とする「散乱性のゴミ」については、単に管理者に処理責務を負わしているだけで、排出者(ポイ捨て者)への責務はない。もっとも、制定時において、今日ほど使い捨て容器が散乱することは予測できなかったことも事実であろう。

周知のように、社会的問題として「空カン公害」を告発したのは京都市であった。観光地のみならず市街地において散乱している空カンがアメニティを損う(環境問題)だけではなく、拾い集めるには費用がかかり、処理をするにも処理困難であり、埋め立てるにも跡地利用を含めてやっかい

な問題を生じる(清掃問題)。

それにもまして、たった一度でその使命をはたし使い捨てられる空カンは、資源の無駄使い(資源問題)というわけである。

飲料メーカーにしてみれば、再利用容器から使い捨て容器への転換は、新奇性によって製品の差別化をはかることもできるし、費用の一部を社会的に転嫁することによって競争に有利となる。

使い捨て容器の「便しさ」だけを強調することによって、廃棄されたあとの「不便さ」は故意に無視される。

京都市の空カン条例専門委員会は、散乱防止と再資源化のために経済的インセンティブをもつデポジット—リファンド(預り金—払い戻し)制度を提案したが、周知のごとく、アメリカでのデポジットつぶしもおとらない業界の政治的圧力のもとに頓挫してしまつた。

使い捨てからリサイクルへ経済構造を転換させるには、環境政策だけではなく資源政策にも有効な手段の研究が課題となる。

(大学経済学部助教授)

昭和五十六年度の厚生省人口動態統計によると、日本人の主要死因はガンが総死亡の二三%で一位となったが、脳血管疾患が二十二%、心臓疾患十八%と循環器疾患がほぼ四十%を占めており、特に心臓疾患はガンと同じく年々増大傾向にあり医学的にも社会的にも注目を集めている。これら循環器疾患―脳出血、脳梗(塞)塞、狭心症、心筋梗(硬)塞、高血圧等―は動脈硬化を基盤として発症する。動脈硬化はアテローム硬化(粥状硬化)、中膜硬化、細動脈硬化に大別されるが、アテローム硬化が臨床的に重要視されている。

動脈硬化を進行させる危険因子として高脂血症、高血圧、肥満、糖尿病、痛風、過度の喫煙、ストレス、遺伝等があげられ、これら因子が複雑にからみ合い、長い年月をかけて動脈硬化を起して来るのである。この中でも血液中のコレステロールや中性脂肪が増加する高脂血症が重要で、コレステロール値の上昇とアテローム硬化との間には関連の強い事が明らかにされている。コレステロールは人体において細胞膜の成

分として多く含まれ、又胆汁酸となって脂肪の消化を助け、更に副腎皮質ホルモン、性ホルモンをつくる等、なくてはならないものであるが、必要以上にあると動脈硬化の原因となる。即ち多すぎても少なすぎてもよくなく、

私の研究 コレステロールと食事 松下紀美子

ある一定の濃度が必要なのである。

血清コレステロールの変動には性、年齢、ストレス、運動等が関係するが中でも食事の影響が非常に大きい。世界各国を調査した学者の報告によると脂肪摂取量の多い国民ほど血清コレステロール値は高く、循環器病が多い。しかし血清コレステロールに影響する食用油脂の作用は脂肪の種類によって著しく異なり、動物性脂肪が血清コレステロールを上昇させるのに対し、植物性脂肪

はこれを低下させる。

植物油のコレステロールに対する効果について、かつて内地留学の機会を与えられた時大豆加工品を中心に検討した事がある。これは日本人が古くから愛好する大豆加工食品として豆腐、湯葉の血清コレステロールに及ぼす影響を動物実験によりみたものである。その結果、豆腐添加群、湯葉添加群は対照群に比較して血清コレステロールの低下効果が認められた。そしてその低下効果は特にエーテルエキス(油区分)にある事が認められた。これは大豆中の多価不飽和脂肪酸とβ-シトステロールによるものである。これにより、日本の伝統ある大豆加工食品は栄養上タン白質源のみならず、コレステロール低下をもたらす脂質を供給するものとして重要である事が再認識させられた。その他に椎茸、海藻類にもコレステロール低下効果のある事が解っており、これら食品を献立に利用する事は有用である。

最近の研究により各リポタン白質中のコレステロールの意義が解明されはじめてい

る。このうちLDLは末梢の組織にコレステロールを運ぶ働きをしているのに対し、HDLはコレステロールを自分の分子中に抱きこんで肝臓に運び排泄処理する即ち動脈硬化を予防する大切な役目をしている。この両者のバランスをみる事が大切となって来ている。

現在糖尿病患者の血清脂質に影響する諸因子について検討中である。糖尿病患者の死因の大部分は合併症、中でも血管障害によるものが最も多く、これの発生防止が重要課題となっているからである。動脈硬化発生要因の一つである高脂血症について、血清脂質の動向をHDLコレステロールを中心に調べている。その結果、肥満者は総コレステロール、動脈硬化指数が高く、HDLコレステロールが低く、体重調整が重要である事が示された。糖尿病の場合は血糖値のコントロールが総コレステロールや中性脂肪の改善にもつながっている。HDLコレステロールを上昇させるには肥満度、中性脂肪、LDLコレステロールの高位に注意しなければならない。食事との関

係をみると飽和脂肪酸を多く含む食品の摂取は総コレステロールを上昇させる事がこの場合も認められ、豆腐をよく食べる人達はHDLコレステロールが高い傾向であった。野菜を多く摂取している人達もHDLコレステロールが高く、食物繊維の影響が考慮中である。アルコールとタバコの影響はアルコールの適量摂取によりHDLコレステロールは上昇している。タバコを吸う人は吸わない人に比べて明らかにHDLコレステロールが低下していた。これはタバコによる低酸素状態が影響しているかららしい。

動脈硬化の予防、治療の基本は危険因子を除去する事である。先にあげた危険因子の中でも高血圧、高脂血症、喫煙の三つは最も関連が深いとされている。特に高脂血症について最近HDLコレステロールを増加させる事に力が入れられている。動脈硬化の発生予防とHDLコレステロールとの関係を食事によって検討したオスローの調査によると、飽和脂肪酸と多価不飽和脂肪酸の比率が極めて重要で1:2程度の比

率がよいとされている。現在の日本人の食生活はこの比率が1:1であり、これ以上の動物性脂肪の摂取は控えるべきである。食事内の脂肪酸組成、コレステロール含量の両者を同時に考慮出来るC:IJ係数の利用も望ましい。次に糖質特に砂糖をとりすぎないようにする事である。これは総カロリーの是正、ひいては肥満の予防にもつながる。ビタミンEやBも効果があるとされている。

動脈硬化の発症は四十代後半からが多い。しかしその兆しは既に十代から現われると云われる。このように長年にわたって少しずつ進行するような成人病に対しては日常の栄養のバランスのとれた適正な食事に期待がかけられるのである。そして日本古来の食事―新鮮な魚、豆腐・納豆等の大豆加工品、海苔・わかめ等の海藻類、野菜を煮たりゆでたりしてたっぷりとする等―の意義が改めて見直されているのではないだろうか。

(女子大学助教授)